

## H30年度 I 期 個人企画

	氏名	渡航先	国・地域	渡航先での受入期間
1	O. R	Gesundheit! Institute	アメリカ合衆国	H30/8/17-H30/8/24

## 平成30年度岸本国際交流奨学金による海外活動実施報告書

医学部医学科3年 学籍番号 \*\*\*\*\*

氏名 **O. R**

以下では、表紙に記載した「3. 今回の海外活動により得られた成果・感想等」について報告する。

### 1. スケジュール（詳細については3. 活動内容を参照）

2018/8/17	関西空港発 ルイスバーグ着 (Greenbrier Valley Airport) 20:30~ オリエンテーション
2018/8/18	9:00~18:30 ワークショップ① 20:30~ Clown One Italia による講演
2018/8/19	9:00~12:00 ワークショップ② 15:00~18:30 文化研修① 20:30~ Clown One Japan による講演
2018/8/20	9:00~18:30 ワークショップ③ 20:30~ ワークショップ④
2018/8/21	9:00~12:00 ワークショップ⑤ 15:00~18:30 Dr. Patch Adams による講演① 20:30~ Dr. Patch Adams による講演及び診療見学
2018/8/22	9:00~12:00 Nursing Home 訪問 15:00~18:30 ワークショップ⑥ 20:30~ 地元のレストランでの懇親会
2018/8/23	9:00~12:00 Dr. Patch Adams による講演② 14:00~18:30 文化研修②
2018/8/24	ルイスバーグ発 (Greenbrier Valley Airport) ワシントン (Washington Dulles Airport) 着
2018/8/25~2018/8/26	ワシントン (Washington Dulles Airport) 発 伊丹空港着

### 2. 目的

- ・国際的にクラウニング活動を展開している The Gesundheit! Institute のワークショップ “The Laughing Body: the Art of Care”に参加し、Dr.パッチ・アダムスをはじめ、活動に

関わっている方々の話を伺い、現在の国際医療を取り巻く状況と、それに対するホスピタルクラウンの取り組みを学ぶ。

・様々な背景を持つ参加者とのアメリカでの共同生活を通じ、それぞれの文化や考え方を学ぶ。

・1週間に渡るワークショップを通じて自分を見つめなおし、自然の中で自分の創造性やユーモアを再発見し、向上させる。

### 3. 活動内容

#### プログラムの概要

“The Laughing Body: the Art of Care”は、NPOである The Gesundheit! Institute が主催する教育プログラムの一つである。

The Gesundheit! Institute は、Dr.パッチ・アダムスが設立したNPOであり、医学生の頃から患者に希望や愛、ユーモアを提供する活動に取り組んできた彼の姿勢を受け継ぎ、愛やユーモアを根底に置いた「人にやさしい医療」の普及に取り組んでいる。具体的には、病院などの臨床現場はもちろん、学校や孤児院、紛争地域の難民キャンプなどでのクラウニング活動（道化師に扮し、辛い状況にある人々に笑いとユーモアを届ける活動）や、一般人向けの医療に関する教育、無償診療所の開設などの活動を国際的に展開している。

今回のワークショップでは、参加者は一週間の共同生活の中で、団体のメンバーや Dr.パッチ・アダムス氏によるワークショップに参加しながら”Care”という言葉の持つ様々な側面について学んだ。

#### プログラムの詳細及び感想

本プログラムは、主に①ワークショップ ②Dr.パッチ・アダムス氏や団体のメンバーによる講演 ③Nursing Homeでのクラウニング活動 ④文化研修で構成されていた。

今回のワークショップでは、The Gesundheit! Institute が大切にしている「人にやさしい医療」の根底にある考え方、及びそれを実践する方法を身をもって学んだ。視線、呼吸、五感、逆に時には目を閉じることで他の感覚を研ぎ澄ませ、相手の状況を知り適切な”Care”を行うこと。物事を自由に表現する、言葉を用いない意思疎通などのクラウニングの技術の基礎。国籍、年齢、性別、社会的地位がそれぞれ異なるメンバーで”Care”の様々な在り方について議論し、互いに実践すること。私たちはこれらのワークショップを室内や自然の



The Gesundheit! Institution

中で、個人やグループで行った。

これらは、いずれも通常の医療現場だけではなく、The Gesundheit! Institute の活動現場のように政治的、環境的、経済的理由から十分な医療が施せない状況下で医療活動を行う際欠かせないものだ。しかしその多くは、日本という恵まれた環境で学んでいる私にはとても新鮮なものだった。特に今回、私が一番興味をもって臨んだクラウニングの素晴らしさや可能性には驚嘆した。

また、プログラムを通じて、私は Dr.パッチ・アダムスや、The Gesundheit! Institute の提携団体である Clown One Italia、Clown One Japan、及びゲストとしてロシアで孤児の保護活動を行っている Maria's Children のメンバーの講演を聞く機会を得た。The Gesundheit! Institute と Clown One Italia は主にアメリカの貧民地域や発展途上国、紛争地域などでのクラウニング活動、金銭的支援及び病院や学校の建設、青少年に対する健康に関する教育に、Clown One Japan は日本におけるクラウニング活動の普及、及び中高生の教育に、Maria's Children は孤児の作った作品を販売することによる自立援助に、それぞれ携わっている。発展途上国、特に紛争地域においては、政治、社会的慣習の違いから外部の組織が医療や教育、支援に介入することは難しい。偏見や差別などによる障害も大きい。例えば、ペルーの重度のやけど患者の病院では、外見による差別から患者は外部との関わりを断ち、社会に復帰することは少ない。また、ロシアでは富裕層が社会的支援をすることが奨励されている一方で、一度低い地位につくとそこから社会的に活躍するのは難しいのが現状だ。しかし、クラウニング活動は、そのような状況をも改善できることを話や映像を通じて学んだ。極限の状況で命がやり取りされる現場であってもクラウニングは患者を幸せな気持ちにし、人と人との距離を縮めることを痛感した。また、Dr.パッチ・アダムス氏による診療を実際に見学し、彼特有の患者との接し方、また医療に対する姿勢を知った。最も重要なことは、健康であること。クラウニング活動を含む医療や青少年の教育がその健康に大きな役割を果たしているという印象を得た。特に「患者、少年、すべての人が先生であり、“Care” の提供者になりうる」というメンバーの言葉



ワークショップの様子



Dr.パッチ・アダムス氏による、講演



Nursing Home でのクラウニング活動

に、厳しく変化し続ける状況の中でも人を愛し、前に進み続けようとする彼らの信念を感じた。

プログラムの最後には、ワークショップで学んだ考え方やクラウニングの技術を **Nursing Home** を訪れて実践する機会を得た。参加者の中には、各国で既にクラウニング活動に取り組んでいるものも多く、私は彼らから患者の心身の状態の見極め方、及びそれに応じた対応の方法を学び、試行錯誤しながら取り組んだ。しかし私は初めての状況にとっても戸惑った。なぜなら、一週間の体験で考え方や方法を知り会得したつもりでいたが、それを実際に医療現場で行う難しさを感じたからである。同時に自分ができる”Care”の在り方を改めて考え直した。

一週間生活を共にし、参加者は自国の文化や料理を披露しあうなど交流を重ねた。その中で私は文化・慣習、考え方の違いを学んだ。また、**Gesundheit! Institute** の施設は、アメリカでは最も収入が少ないといわれる **West Virginia** に位置し、現地の人々がしばしば訪れる公共の場としての機能も果たしている。そのため周辺住人と交流でき、一般的なアメリカ人の生活状況や政治、医療に対する考え方を知ることができた。また、**National Park** を訪れ、アメリカの雄大な自然を感じた。



日本の茶道の紹介

#### 4. 成果、今後の抱負

私が、今回、このプログラムに参加したきっかけの一つは、「笑い」が心身に及ぼす影響に大きな可能性を感じたことだった。医療現場の「笑い」が、患者だけでなく、医療現場全体に良い影響をもたらすと信じていた。

クラウニング活動からも分かるように、「笑い」が医療現場に及ぼす可能性は計り知れない。しかし今回のプログラムを通じ、ただ「笑い」をもたらすだけでは不十分であることを実感した。プログラムの中では、「笑い」を“Care”の一環として捉えている。“Care”は“Cure”とは異なり、疾病ではなく広く人間全体に焦点を置く。そのため、“Care”の方法には正解はなく、だれもが”Care”を提供し、受けることができる。重要なことは、「笑い」だけにこだわるのではなく、心身状態を適切に見極め、必要とされている“Care”を提供することで人々の健康増進に努めることだと感じた。

「人にやさしい医療“Care”」を実現するために必要なことは何か。私は今回の留学では

明確な答えを得ることができていない。しかし、まずは”Care”の考え方を広めること、そして私自身が実践していくことが大切だと感じた。私は今回学んだことを、医学生間で共有し深める場を設けるつもりだ。また、適切な”Care”を行うためには、医学的問題だけではなく、広く集団全体、及び各個人の持つ背景を見極めることが必要だ。これには、私がかねてから興味を持っている公衆衛生学をはじめとする、様々な分野を勉強することが不可欠である。また、”Care”という漠然としたものを確固としたものとして医療に組み込むために、データの収集・蓄積、ガイドラインの作成も必要だろう。私は医学部生として真摯に学びを重ねたい。

また、今回のプログラムでは、”Care”の在り方を学び、様々な文化や考え方に触れる中で、自分自身も”Care”の対象となり、自分自身の持つ新たな側面に気づくことになった。この気づきを将来に活かし、社会に貢献できる医師を目指したい。

最後に、今回の留学に際し、岸本先生をはじめとする岸本国際交流奨学基金関係者の方々、公衆衛生学をご教授下さり様々な助言をくださいました磯先生、大平先生、受け入れやワークショップ主催に際しご尽力いただきました Dr. Patch Adams, Mr. Italo, Ms. Ginevra, 金本氏など、多くの方々にご協力頂きました。この場を借りて深く感謝申し上げます。ありがとうございました。